
失恋ハイキング

新辺カコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失恋ハイキング

【Nコード】

N9255Y

【作者名】

新辺力コ

【あらすじ】

ケンカの腹いせに山に来たわたし。案の定道に迷ってしまい…。

「ああ……。困ったな」

わたしは途方に暮れた。山歩きで、道に迷ってしまったのだ。

「こんなハイキングコースで迷うなんて」

楽な道だと、たかを括ったのが悪かったのか、それともイラついていたのが悪かったのだろうか。とにかく少し休もうと、木陰に腰をおろす。疲労が、ドツと襲ってくる。

「とんだ休日になっちゃったなあ……。疲れた……」

そう、もう疲れた。肉体的にも、精神的にも。

わたしには、婚約者がいる。いや、もう『いた』と言うべきか。

木陰で涼みながら『元』婚約者の言葉を反芻する。わたしにくれた、あたたかな甘い言葉を、ひとつひとつ。思い出すたびに、涙がこぼれた。

あんなに愛してくれていたのに、こちらも懸命に愛したのに……！それは、ほんのひと月前の事。彼の部屋に遊びに行ったときのことだ。そこでわたしは見つけてはならないものを見つけてしまったのだ。

ベッドに落ちていた、長い髪の毛。あきらかに彼のものとは違う、細く柔らかな黒髪を。

『お前のじゃないか？』なんて、白々しく嘯かれたけど、わたしは脱色しているから、髪の色は明るいブラウンだ。質感だって、傷んでパサパサ。あの柔らかな髪の毛とは、似ても似つかない。

勿論、大喧嘩になった。

彼とは、あれから一度も会っていない。何回か、電話がかかってきたけれど、全て無視した。嫌だったからだ。彼だけではなく、自

分自身の事も、たまらなく嫌だった。

彼の声을聞けば、きつと恨み言を言ってしまう。

彼の顔を見れば取り乱してしまう。

きつとそうなるであろう自分を想像し、嫌悪感到震えた。

やり場のない怒りと焦燥感を鎮めるために、わたしは逃げた。仕事に、趣味に時間を費やした。

この山歩きも、そのひとつだ。

でも、まさか道に迷ってしまうなんて。

「寒くなってきたし、困ったなあ……」

空が曇り、風が冷たくなってきた。冷えたせいなのか体が重くて、だるい。

まるで、自分の体が自分の物でないみたいだに動かせない。さらに悪いことには、

「眠い……」

激しい眠気までおそってきた。

おかしい。今まで何回も山歩きをしているけど、こんな経験はただの一度もない。急に体が動かなくなるなんて。

離れなければ。とにかくここから離れなければ。

半ば霞がかった頭の中、動物的な本能が『逃げろ』と告げていた。

ここは『ヤバイ』と。

逃げたい。ここから。しかし眠気が邪魔をする。

「逃げなきゃ……。ちくしょう、なんでこんなときにアイツの顔なんて……！」

睡魔に呑み込まれる間際、彼の顔が脳裏に浮かんだ。

「あいたい……」

そう言ったことに少し悔しさを感じながら、わたしは意識を手離れた。

(……寒い)

尋常ではない寒さを感じ、わたしは目を覚ました。

まだ頭はボーっとするが、さっきまでの体のだるさは消えている。それにしても、寒い。冷たい風が直接、体の中で吹き荒れているみたいだ。

「わたし、死んだのかな……？」

起き上がって、震えながらぼんやりと呟く。その問わず語りの言葉を受けて、

『正確には、死ぬところだったのよ』

声が聞こえた。女の子の声だ。

「誰？ どこにいるの」

わたしは震えながら叫んだ。辺りを見回しても、誰もいない。

『あなたの中にいるわ』

声が響くたびに、体の中に風が吹き荒れる感覚が走った。その声

の主がわたしの中にいる？ 戦慄し、叫んだ。

「い、いやだ。出てってよ！」

『あら、こうでもないあなた、良くないモノに憑かれるとこだったわよ』

「良くない、モノ……？」

『そ、とおってもタチの悪い、ね。あいつらは生きた体を狙ってるの。魂が抜けたばかりの、空っぽになったいれものを欲しがってるから、たまに強引な事するのよ』

「嘘よ」

そんなオカルトじみた話、信じられなかった。全力で否定したが、わたしの中にいる『もの』は別に気を悪くした風もなく、

『あなた、最近やなことあったでしょ。それが、心にずっと引っかかってる事とか』

そう、聞いてきた。」

『そういう、付け入る隙がある人の魂はね、引っ剥がしやすいの。イヤなこと、悲しいこと、腹が立ったこと。そういうのをいつまでもウジウジ引きずってる人は、簡単に憑かれるのよ。さ、私が案内するわ。山を降りるのよ』

「あなたは……なんでわたしを助けてくれたの？」

彼女は、しばらく考えているように黙っていた。

「ねえ、どうして？」

『……似てたから、ね。あなたと私』

彼女はぼそぼそと話しはじめた。

婚約者がいたこと。その人のことがとつても好きだったこと。

そして、好きだったその人に手酷く裏切られたことを。

『汚らわしく感じたわ。あの人も、あの人を憎む私も。なにもかも……それで』

彼女は、してはならないことをした。取り返しのつかぬことを……。婚約者に対する当て擦りのつもりだったという。

『あの人、山が好きだったの。だから私、この山で……。ずっと昔……』

「わたしは死のうなんて思わないわ！ そりゃ……彼のことは憎いけどさ……」

『嘘。憎いなんて。あなた、さっき眠ってしまう前に言った言葉、覚えてないの』

「……それは」

『私は、あんな言葉は出なかった。あの人の顔も、浮かばなかったわ。……ただ、悲しかった。さびしかった。私が苦しんだように、

あの人も苦しめばいい。ただそれだけの思いで、一つしかない命を使ったの……。ね、あなたは……私になっちゃダメよ。まだ心に彼がいるなら、あなたはしあわせだから」

わたしは、ただ黙って彼女の言葉を聞いていた。

『私ね、本当はあなたに取り憑くつもりだったの』

「どうして……そうしなかったの？」

簡単に出来ただろうに。気まぐれと言うには安易すぎる。

『もう、男女のしがらみは懲り懲り』

消え入りそうな声で、彼女は言った。

『もうじき、ふもとだわ。……日常に戻ったら、ちゃんとケジメつけなくちゃダメよ』

あれは、疲れが見せた幻覚幻聴だったのか。それとも、現実にあったことなのか。本当にわたしの中にこの世のものではないものが入って、世話をやいてくれたのだろうか。実際のところはわからない。とにかく、気がつけばわたしは最寄りのバス停にいた。

今からなら、最終バスに間に合うだろう。

「アア、寒い」

夕間詰めに吹く、つめたい風に震えた。体の表面をなでる、つめたい、本物の風。体の中から風が吹く感覚は、もうない。

「ケジメ、つけなくちゃ……ね」

もう、わたしは逃げない。

『私になっちゃダメよ』

そう、言われたから。

迷惑と言われようと、これから彼の家に押し掛けてみようか。そしてとことん話し合おう。双方納得できる答えがでるまで、ずっと。携帯を取り出し、かじかむ指で電話をかける。数回コールの後、驚いたような彼の声が聞こえてきた。たったひと月聞かなかっただ

けなのに、妙に懐かしい。

「今夜、あなたの家に行ってもいい？ 話したいことがあるの」

彼の声が、弾んでいる。その返事は色よいものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9255y/>

失恋ハイキング

2011年11月27日18時48分発行